

国立歴史民俗博物館企画展示 「学びの歴史像——わたりあう近代」に学ぶ

栗林 幸雄

「学びの歴史像」概要

歴史に学ぶ視点を育むうえで、博物館は貴重な学びの場である。問いを磨けば磨くほど、展示を通じて歴史と対話することができる。筆者は国立歴史民俗博物館(歴博)の博学連携研究員として、2期4年のあいだ、博物館で授業をおこない、その魅力を授業に活かそうとつとめた。新科目・歴史総合の学習では、教師がどのような問いを発し、問題意識をやしなうかが重要である。その問いを磨くうえで刺激になった展示が、企画展「学びの歴史像——わたりあう近代」であった。この企画展示は、国立歴史民俗博物館で、2021年10月12日(火)から12月12日(日)まで開催されたものである。

展示は全6章構成で、企画展示室A(1～3章)では、地図と言語を通じて、「西洋の衝撃」を受けた日本がどのような変化を遂げたかを学んだ。地図は世界観を表す。開国後の日本はオランダ語から英語へシフトし、超大国イギリスから世界情勢を学んだ。伊能地図などで蓄積された知識は、イギリス海軍との協力を通じてノウハウを蓄積し、海図の作成につながった。明治維新後も、榎本武揚や渋沢栄一などの旧幕臣が新政府に登用され、「知識人」が日本の近代化を担った。高等学校の世界史において、アジアの近代史は、まずは政府が改革を担い、そのつぎに知識人が担い、最後に大衆が登場する展開を学ぶ。世界史の展開を視野に入れながら展示を見学すると、知識人が近代化に果たした役割をより深く学ぶことができる。

企画展示室B(4～6章)では、伝染病やアイヌ・琉球を通じて、未知なるものをいかに理解しようと

したかが検証された。本稿では、このBの展示の一端を紹介しよう。

歴史学習における問い

(1) パンデミックという不測の事態への対処

まさに「歴史総合」の学習指導要領では、「グローバル化への問い」として、「感染症」が学習活動の一例としてあげられているが、展示の第4章「文明」に巣くう病^{すごろく}では、「衛生看護^{すごろく}」が紹介された。このすごろくは、子どもが遊びのなかで「衛生」を学ぶためにつくられた。科学的な知見が伝わり、迷信や教訓では対処できなくなった時、感染症は「わからないもの」として処理できず、ひた隠しにされた。パンデミックを経験した我々は、過去の事例に学び、不測の事態に備えることが大切である。感染症との向き合い方を歴史に問い、学びを深めたい。

なお、歴博には、貸出教材として多くのすごろくが所蔵されている。時代背景と個人の選択を考えるうえで、重要な教材の1つであり、授業での活用方法が、歴博のホームページで紹介されているため、ぜひ活用したい。

(2) 異文化理解の視点

歴史学習における重要な課題の1つに異文化間交流がある。第5章「アイヌが描いた未来」では、ロシア・中国(清)・日本の三者を仲介したアイヌの役割に焦点を当てた。1811(文化8)年、国後島で抑留されたロシア軍艦艦長ゴローニン一行のなかに、北千島のアイヌ・アレクセイ(アイヌ名シコケシフシュ)が含まれ、幕府の通詞を介して、奉行とゴロウニンの通訳をおこなった。アイヌ語を介して日本人はロシアの言語と文化を知ったのである。「日

本に取り込まれたアイヌ」という主従関係でとらえるのではなく、「アイヌが日露交流に果たした役割」という新たな視点を学んだ。展示のポイントは、支配する側の論理だけではなく、支配を受ける側がいかに適応しようとしたかにある。

特筆すべきは、アイヌ語聖書が存在である。ギリシア語や英語から翻訳し、日本語を介さずに西洋文化を学ぼうとする試みは興味深い。異文化理解とは2つの文化を比較することだけではなく、多言語・多文化を比較する視点を持ち、立体的に自己理解・他者理解を深めることである。

(3) 学校教育が育む「標準」

第6章「学校との出会い」では、体操と音楽を通じて、学校が国民意識を育む過程を紹介している。

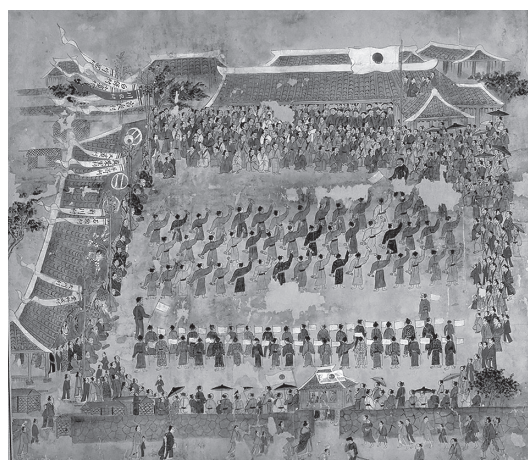


図1 八重山風俗図より「亜鈴体操」(1890(明治23)年頃、沖縄県立博物館・美術館蔵、カラーは巻末図版下参照)

亜鈴は、両端に球形のおもりを付けた体操用具である。図1では、八重山の役所にあたる「蔵元」の敷地で実施された女学生の亜鈴体操と、地域の人々が興味深そうに見物する様子が描かれている。役人と男子学生以外は、みな琉装に結髪をしている。周囲では興味深そうにみつめる人々も描かれているが、近代学校制度に対する戸惑いをみることができる。展示では、1879(明治12)年の沖縄県設置後、はじめて天長節を祝う沖縄の戸惑いをうかがわせる新聞記事が紹介されていた。アイヌの例と同様に、琉球が支配者の論理を無批判に受け入れたわけではない。

筆者は「亜鈴体操」をみて、自分の子どもが中学校の運動会でダンスをするのをみて驚いたことを思い出した。2008年3月の学習指導要領改訂で、中学

校の保健体育において、武道とダンスが必修となった。現代においても学校は新たな「標準」を学ぶ場であったのだと痛感した。

また、スコットランド民謡「オールドラングサイン」が「蛍の光」として日本に定着する過程についての展示は興味深かった。この曲は、1882年にキリスト教とともに賛美歌として、日本へ伝わった。4番の歌詞は、当初「千島の奥も 沖縄も」で始まり、「八洲のうちの守りなり 至らんくに いさおしく つとめよわがせ つつがなく」と続いた。日露戦争後、冒頭の部分は「台湾のはても樺太も」にかわった。ポーツマス条約で、日本は樺太南部を領土としたからである。本来の歌詞と異なり、西欧化を進める日本が、国民意識を育てるという教育的な観点から、歌詞を変更したのだろう。学校教育が果たす役割の大きさを感じた。

なお、実際の展示室ではスマートフォンで2次元コードを読み取って聞くことができ、生徒の意欲を引き出すことができそうである。勤務校では、生徒が全員iPadをもつようになった。ICTの特性を活かした授業を展開するにあたり、質の高い音楽・映像教材を博物館が提供することを期待したい。

企画展示で得た視点は常設展示の見学に活かしたい。常設展示は、歴史の展開を空間の広がりとして学ぶことができる。第6展示室の前半は、日清戦争から太平洋戦争までの50年間を見渡せる。展示室の入り口に立った時、50年後の世界に至る道筋を、だれが予想できるだろうか。また、近現代を扱う第5展示室と第6展示室には、ポスターが多く展示されている。とりわけ、大衆向けの宣伝を目的としたプロパガンダポスターは、美術的な観点よりも、政治的な目的を優先したことがわかる。デジタルアーカイブスでも資料はみることはできるが、実物の色や大きさをみるにまさるものはない。

歴史研究は文字資料に依拠してきたが、近年は地図・絵図やポスターなど非文字資料を活用する手法が進んでいる。生徒がこうした資料をいかに読み解き、歴史に学ぶことができるのかを教師が探究するうえで、博物館は重要な役割を果たしている。

(くりばやし・ゆきお／土浦日本大学高等学校教諭)